令嬢と下働き
総ページ数110
姉妹
アナル
処女
無許可
中出し
オナニー
ロリ
ふたなり
寝取り
催眠
R18
ADULT ONLY
成人向け
18才未満の購入・閲覧禁止

領主の妻が第一子であるロゼを身籠るころ、
執事長の爺さんが領主の妾との間に子をこしらえた。
子供が母の特徴を色濃く継いで
生まれてきたのは、不幸中の幸いだった。
妾が領主のお気に入りだったこと、
執事長の老い先が短いことからこの件は不問とされ、
子供は領主と妾の子として、育てられる。

しかし、その後、領主と妻の間に生まれたのは、
ロゼの妹のメルだけだった。
妾との間にも子は出来ず、事実を知る者には、
執事長の呪いと呼ばれた。
このままでは、執事長の血筋が
この土地を治めることになってしまう。

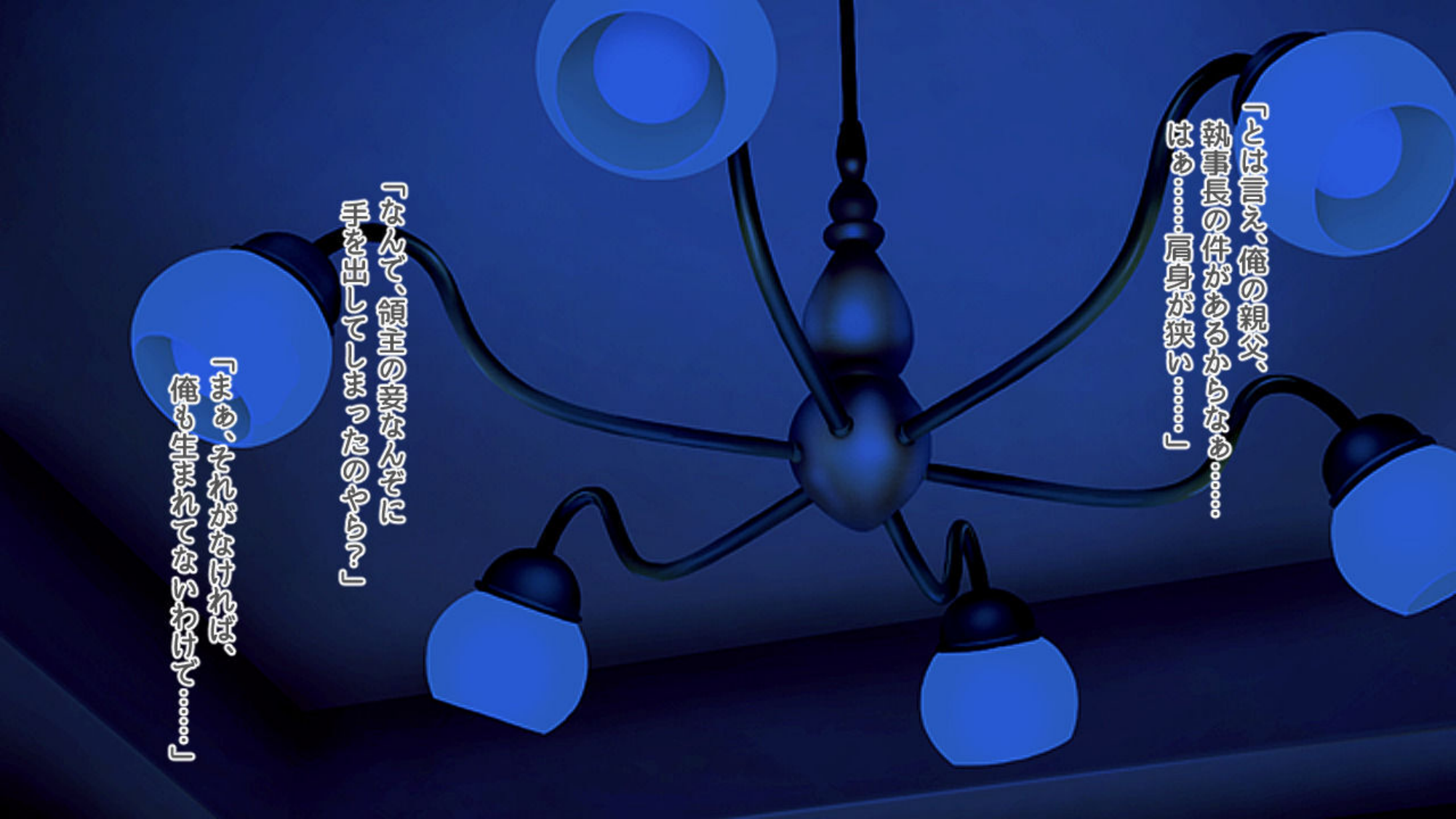
どうしてもそれを避けたい領主は、
長女のロゼに事実を告げ、見合いをさせる。
相手は、領主の古くからの友人の息子で、
凡庸だが誠実な男だと言う。
ロゼもまた、誰に知られることなく、
彼に恋心を抱いていた。
ロゼの容姿や強気な性格もあり、
見合いは上手くいき、婚約は成立した。
妾の子は下働きのまま、この件は
静かに解決したかのように思われた。
しかし、数日たった夜、屋敷の中には、
なにやら不気味な気配が漂っていた。

「今日も今日とて、下働きの仕事。疲れたな。」

「可愛いご令嬢のお世話、
食事も寝床にだって困らない。」

「メルは、可愛らしい容姿に、
ちょっと天然だが、素直な性格。」

「ロゼは、当たりは強いが、
それを補って、余りあるほどの容姿。」


「とは言え、俺の親父、執事長の件があるからなぁ……はぁ……肩身が狭い……」
「なんで、領主の妾なんぞに手を出してしまったのやら？」
「まぁ、それがなければ、俺も生まれてないわけで……」

「それは、違うぞ。」
「うわ！親！？執事長？
死んだはずじゃ！？」
「親父で構わん。
お主の言う通り、儂はもう死んでおる。」
「そんなことより、
落ち着いて聞くのじゃ、我が息子よ。」

「儂の愛しのメイド長を寝取り、妾に据えた、
あのくそ忌々しい、領主。
奴の言うことなど、信用してはならん。」

「せっかく、儂が日々の食事に毒を盛り、
種なしにしてやったというのに……」

「2人も子宝に恵まれるとは、
正妻の方はよほど、ざるだったとみえる。」

「2人とも、おなごじゃったから、油断しとったが、
あの領主め、娘に婿をとると言い出しよった。」

「このままでは、儂の血を引いたお主を
跡取りに据える計画が台無しじゃ。」

「親父と領主の間にそんなことが……!?
唯の噂だと思っていたけど、執事長の呪いってのも、
あながち間違っていなかったわけか……」

「息子よ。儂に代わり、あの男への復讐を
果たしてはくれんか？上手くすれば、お主が密かに
好意を寄せている領主の娘たちも
手籠めにすることができるかもしれんぞ。」

「正直、親父の話を聞いて、
俺は、その意志継いでやりたいと思った。」

「そうか、
じゃったら……」

「でも、無理だ。」

「執事長だった親父と違って、
俺は、ただの下働き。復讐って言っても、
出来ることなんて、限られている。」

「心配するな。息子よ。策はある。」

「机の一番上の引き出しを開けてみよ。」

「そこには、
特に何もなかったような？」

「ふぉっふぉっふぉ。
2重底じゃ。」

「これは！？」

「赤い瓶は催淫剤、ワンプッシュで、
どんな娘も言いなりじゃ。
青い瓶は精力剤、若いお主には、
必要ないじゃろうが……」

「こっちの写真は？」

「よくぞ、聞いてくれた。
我が息子よ。
それこそは、儂と
お前の母さんとの初夜の……」

「ふぁ～。眠くなってきたな。」

「明日も早いし、親父の思い出話は、
また、今度、聞かせて貰うよ。」

「おやすみ。」

「待つんじゃ、
まだ、大事な話の途中……。」

「ぐぅーぐぅー」

「これが最後じゃというのに……」

「まぁ、写真の件は、
そのうち気が付くじゃろう……」

「ではな。息子よ。
空の上から、健闘を祈っておるぞ。」

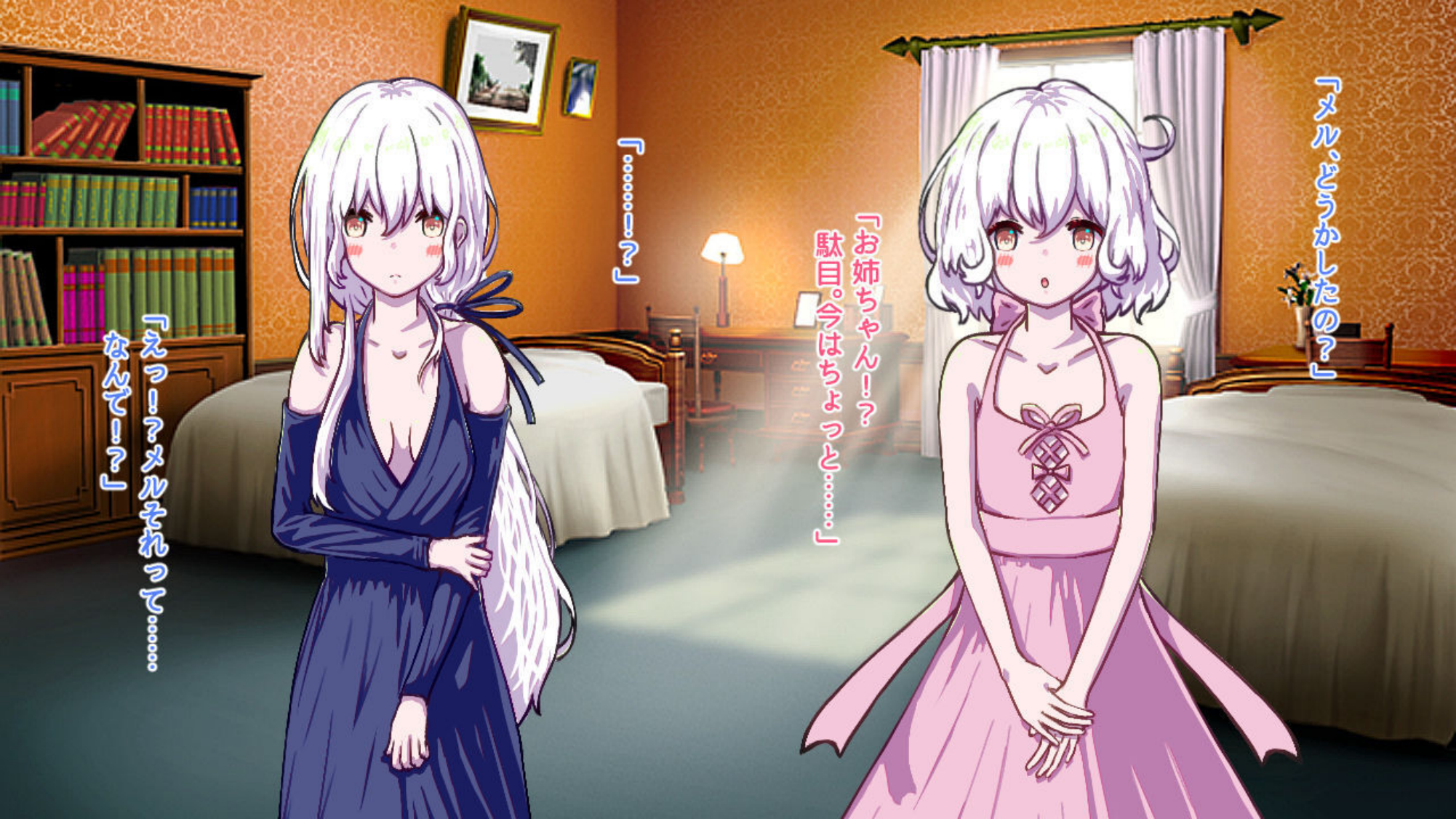
「ふぁ～、良く寝たー。
今日も一日楽しもう。おー。」
ドンっ
「きゃっ」
「メルお嬢様、申し訳ございません。
お怪我はありませんか？」
「あっ、はい。
下働きさんこそ、大丈夫ですか？」

「ふぅ、良かった。
私の方もなんともありません。」
「す、すみません、
それでは、私はこれで。」
「あんなに慌てて、
どうしたんだろう？」
「まっ、いっか。
そんなことより、朝ご飯っと。」

「あれ？何か落ちてる。
下働きさんのかな？」
「なんだろう、
石鹸みたいな香りがする。」
プシュッ
「分かった、香水だ。
後で、返しに行こうっと。」
「でも、下働きさん、
香水なんて使ってたっけ……？」

「はー、お腹もいっぱいになったし、
ちょっと休憩っと。」
「……!?」
「えっ!なんで?
だって、これって男の人の……」
「どうしよう?
おちんちん生えちゃった。」

「んんっ……なに？……変な感じ……
ドレスの裏地のザラザラに擦れて……」
「ひゃっ……なんで？
大きくなっちゃった……」
「もー、こんなの、
どうすればいいのー？」


「メル、どうかしたの？」
「お姉ちゃん！？
駄目。今はちょっと……」
「……！？」
「えっ！？メルそれって……
なんで！？」

「メルにも分かんないよぉ。」
「ご飯を食べて、休んでたら急に……」
「はぁ……はぁ……」
「メル、大丈夫？
息も荒いし、顔も真っ赤じゃない。」

「お姉ちゃん、これ大きくなっちゃって、切ないよぉ。」
「メル、男の人のはね、一回シちゃえば、治まるって聞いたことがあるわ。」
「お姉ちゃん、シちゃうって何？どうしたらいいの？」
「そうよね、ごめんね。お姉ちゃんに任せて。」

「こうやって、優しく、握って……」
「ひゃんっ……」
「ごめんね。痛かった？お姉ちゃんも、本物に触るの初めてだから……」
「違うの、お姉ちゃんの手、ひんやりしてて……びっくりしちゃっただけ、もう平気。」

「そっ?よかった。じゃあ、続けるね。
えっと、確かこんな感じで、前後にしこしこーって。」
「待って、お姉ちゃん、おちんちんが、
びくんってして……なんか変なの。」
シコシコ
びくん
「大丈夫よメル、それでいいの。
お姉ちゃんの手で感じてくれてるのね。」

「はぁん……お姉ちゃんの手柔らかい……
あっ……今の……気持ちいい。」
「ここね。メルの弱いところ見つけちゃった。」
シコシコ
シコシコ

「んっ……あっ……お姉ちゃん……
そこばっかり……だめぇ……」
「ふふっ……メルの感じちゃってる顔……
可愛い……そんなの見せられたら……
もっと、虐めたくなっちゃう。」
シコシコ
シコシコ

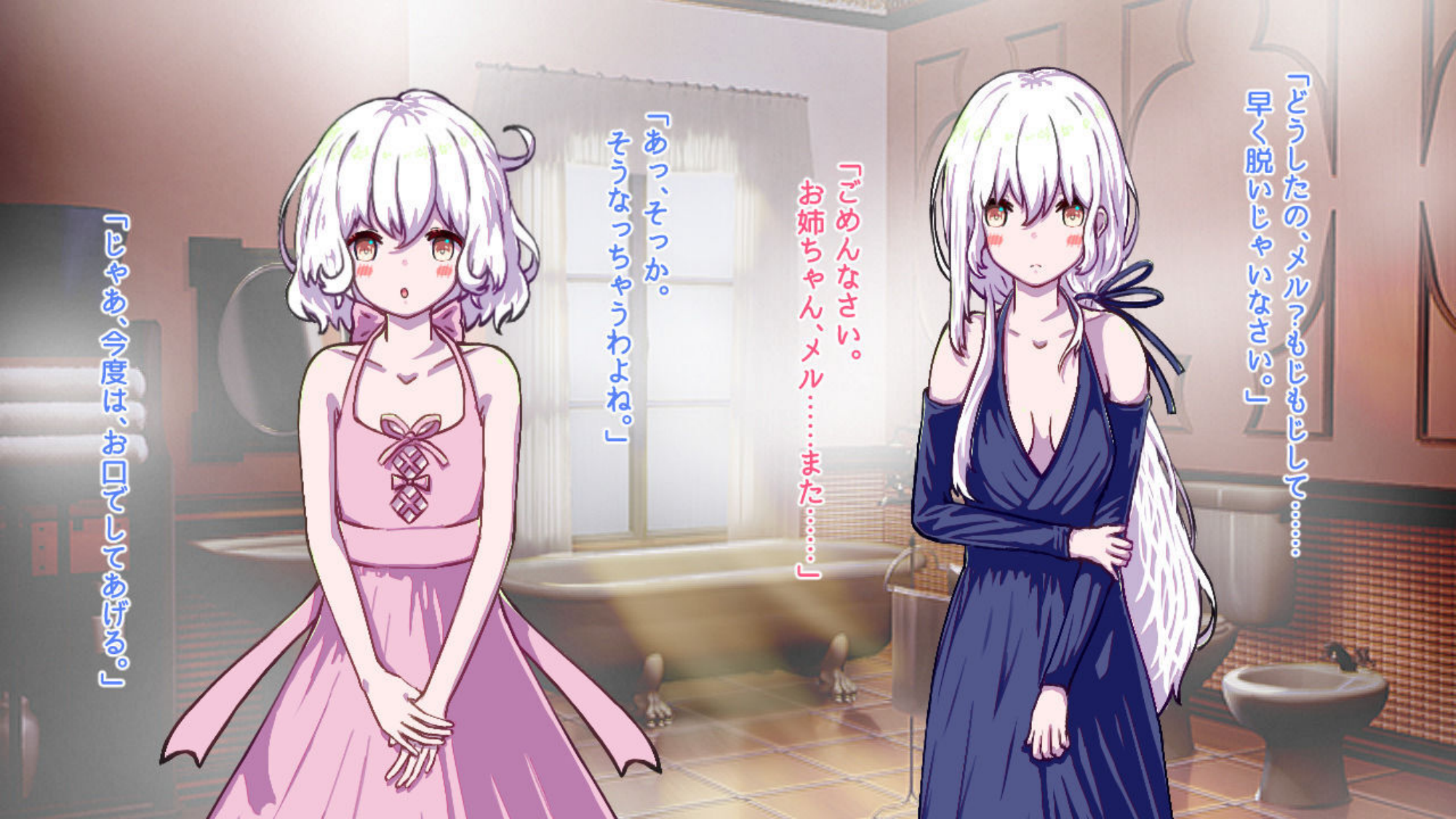
「んっ……お姉ちゃんのいじわる……
あっ、だめ、なにかくる……きちゃう……」
「そろそろかしら。少し速くするけど、
メルは、そのまま、じっとしてて。」
シコシコ
シコシコ

「ひゃっ、……だめっ……んっ……
あっ……もう……」
「あっ……あっ……
らめえええええええ……」
ぴゅるっ
ぴゅるるっ
「……」

「はぁ……はぁ……
気持ち良かったぁ。」
「どう？メル落ち着いた？」
「うん。ありがとう、
お姉ちゃん。」
「どういたしまして。」

「それにしても、たくさん出たわね。」
「汚しちゃって、ごめんね。」
「ううん、一緒にお風呂で、綺麗にしましょう。」
「うん。」

スルリ
「でも、どうしたものかしら。
そのままってわけにもいかないし。」
「しばらく、様子を見て駄目そうなら、
お医者様に来てもらうくらいしか……」
「うん、ちょっと、恥ずかしいけど、
そうするしかないよね……」


「どうしたの、メルっ…もじもじして……
早く脱いじゃいなさい。」
「ごめんなさい。
お姉ちゃん、メル……また……」
「あっ、そっか。
そうなっちゃうわよね。」
「じゃあ、今度は、お口でしてあげる。」

「お姉ちゃん！？なに！？」
「ふふっ。メルは、じっとしてて。お姉ちゃんが良くシてあげるから。」
「たしかこんな感じだったかしら？」

「なにこれ？手でされるのより、
ふわふわする。それにお口の中、温かい。」

「ひゃっ、舌が動いて……」

チロチロ

「良いところに当たる？
じゃあ、これはどう？」

「えっ、なに？お口の中、狭くなって……熱い。
熱くて……おちんちん、溶けちゃいそう。」

じゅぷ じゅぷ

（最後に、まだちょっと、
苦手だけど……これで、
イかせて、お終いにしてあげる。）

（お姉ちゃん！？そんな奥まで……
……苦しくないの……？）

（でも、これ、気持ち良すぎて……）

（……もう、出ちゃう……）

じゅぽぽぉ

「かはっ、けほっ」

「うぅ～、メルのばかぁ、出し過ぎよ。」

びゅるるるるぅ

どろぉ

「はぁ……はぁ……」

「でも、これで落ち着いたんじゃ……？」

「ってメル!?それ、
さっきより大きくなって……」

「はぁ……はぁ……
お姉ちゃん……メル、
ここに……挿入れてみたい……」

「えっ!?メル、駄目よ!?
そこは、分かってるの?」

「わからないけど……
お姉ちゃんのここ見てたら
こんなになっちゃって……」

「そこは、あの人のものだから……
赤ちゃんできちゃうからぁ。」

「赤ちゃん!?」

「だから、ね……
お願い……」

「代わりに、お尻の穴なら
好きにしていいから。」

「はぁ……はぁ……
お尻の穴ならいいの……？」
「こんなに小さいのに……
おちんちん……挿入るの……？」
「そうよ、メル。そっちの方が
好きな人もいるそうよ。」
「ちゃんと、綺麗にもしてるし。」
「そうなんだ。じゃあ
お尻の穴にするね。」

「んっ……メルのが……
挿入ってくる……
おっ……大きいのが……
おんっ……お尻の穴に……」

「お姉ちゃんのお尻の穴……
あんなに小さかったのに……
挿入っちゃった……」

「メルの……また
大きくなってる……」

「お姉ちゃんの中、
狭くて、気持ちいい……」

ぬぷぷ

「んっ……私、初めても、まだなのに
あっ……妹にお尻、犯されちゃってる。」

「お姉ちゃんなのに……妹のおちんちんが
気持ち良すぎて、クセになりそう……」

「お姉ちゃん……メルも……
もう、おかしくなっちゃいそう。」

「でも、まだ、もっと、深く
気持ちよくなりたい。
ずっと、こうしていたいよぉ。」

ぬちゅぬちゅ

「あっ……あっ……まって……
奥……そこ……ダメっ……」

「んっ、お姉ちゃん……
ここが好きなんだ……」

「おっ……おぐ……
あが……んぐ……」

「すごい、えっちな声……」

ぱんぱんっ

ぱんぱんっ

「おっおんっ……メル……
お姉ちゃん……も、もう……」
ぱんぱんっ
ぱんぱんっ
「うっ、お姉ちゃん……
メルも……そろそろ……」

「メル!?……
そんなに激しくされたら……
おっ……んんっ……私……
ダメっ……お尻でイっちゃう……」
ぴゅるっ
ぴゅるるるるっ
「あっ……お姉ちゃん……
メルももう……んっ……あっ……
だめっ……イく……
いっちゃうううううううう……」

「はぁ……はぁ……
お尻でするのって……
こんなにも……
気持ちいいんだ……」

どろぉ

「はぁ……はぁ……
お姉ちゃん……見て……
おちんちん……消えたみたい。」

「本当？良かった。」
「ありがとう。
お姉ちゃん。大好き。」
「私もよ。メル。」